

ニンニの茶碗づくりワークショップ

2016/4/28

陶磁器専攻のフィンランド人留学生マクリン・ニンニが、つちのいえの丘(村井農園)で各自集めた土を使って、マイ茶碗をつくるワークショップを開催した。陶磁器専攻以外の学生にはとても新鮮な体験になった。



「ニンニさんに教わりながら、各自好きな色の土を選んで、特に決まりはなく、自分の好きなように造形して茶器を作りました! 途中上回生や院生の先輩、先生も「何してるの?」と来られ、先生からは「膝や肘の形を取って造形してみては」とアドバイス貰ったりしました。」(報告と写真:増尾ひいろ、長野美里)



ニンニによる土の準備のデモンストレーション。のちニンニは、自分の修了制作にもつちのいえの丘の粘土を活用した。



「窯は1時間交代で、20時過ぎごろまで薪をくべておりました。お昼には、差し入れの焼き芋と焼きじゃがいも(?)もいただきました。窯は予想以上の熱さと根気のいる作業ですが、皆楽しんで作業していました。温度管理がとても繊細!」(報告:神山実貴子)
*指導はつちのいえOBの下村一真(陶磁器M2)

水のみちで気づいたこと

自然の中で造形活動を行うつちのいえは、さまざまな気づきの機会をもたらしてくれる。どしゃ降りのなか、作業環境をよくするために掘っていた長い溝を見て、はっとすることがあった。人が大地に住まうとき、最初にやるべきは、

溝、つまり水のみち(道・路・途)をつくることだ。それが場所の質を保持する。溝は、地面のあちこちに浸透し、また地表を流れる水を取り集め、一筋の流れを生み出す。当たり前のことだが、視点を変えれば、溝は、地面の見えにくい水の流れを取り集め、可視化しているといえる。水のみちの出現が見えないものを見るようにし、場所を場所たらしめるのだ。それは芸術作品ではないが、芸術作品の働きを示唆している。いや、作品とはそもそもこうした溝、存在の凹みのようなものかもしれないと思った。



ゆうがとう 誘蛾燈

2011年～2015年夏

つちのいえは、前身の大枝アートプロジェクト以来、地域の人たちに大変お世話になっていて、交流が欠かせない。

大枝アートプロジェクトで復活をお手伝いした大原野北春日町の誘蛾燈は、毎年7月上旬の日暮れに行われる地域の風物詩。つちのいえ有志も毎年参加し、あぜ道に点々と立てられた水盤の灯に点火して回るお手伝いをした。

宵闇迫るなか、京都の遠い街並みを背に、夢のように美しい時間が流れる。



15個の水盤と灯心入れは椎原保さん（美術家・京芸構想出身・大枝アートプロジェクトメンバー）の手づくり。



松明は地元の齋藤兼治さんと齋藤諭さん、水盤の台は大五さんの手づくり。地元の子どもたちも参加する。



松明で火を灯して回るつちのいえの学生。青く染まる夕暮れの里山の風景に、点々と灯る誘蛾燈が美しい。なお2021年現在、誘蛾燈は行われていない。



つちのいえの夜



2015年12月、暖簾完成でつちのいえの意匠性が高まったのを受け、長谷川直人先生がLEDテープを壁の上部に見えないようにつけることを提案。夜の闇に、つちのいえが幻想的に浮かび上がる。

2016年2月の作品展では、土間座のインテリアとともに、近づき隊のアプローチ、足湯、村井農園、のれん、ツリーテラス、さらに茶庭も一般公開した。

